屁理屈艦これ合戦

kokohm

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某所で行われていた屁理屈推理合戦という推理ゲームを艦これキャラにさせようというだけの作品です。

※不定期更新、及び展開上艦これキャラが犯人や被害者になります。その辺りをご承知の上でお読みください。

目　次

装填

装填

「――屁理屈推理合戦の時間だ！」

そんな言葉と共に、『七駆の部屋』のプレートが下げられたドアが勢いよく開かれた。これをなした漣に対し、室内の三人――朧、曙、潮は眼をまたたかせる。

「なによ、急に」

「屁理屈推理合戦をやりたいってことじゃないかな、たぶん」

「その通り！　朧ナイス！」

「いや、知らないけど。というか屁理屈なんたらって何よ」

「おうっ、ぼのはご存じない？」

どこかの駆逐艦のような鳴き声を発しつつ、漣は微妙に怪しい日本語を発する。知らない、と首を横に振る曙に、仕方ないとばかりに漣は人差し指を立てる。

「では、説明しましょう！　屁理屈推理合戦とは、魔法を認めさせたい『魔女』と、魔法を否定する『探偵』によって繰り広げられる、一種の推理ゲームです」

「もうちょっと言うと、まず魔女の側が人に起こせるとは思えないような、摩訶不思議な事件を提示する。それを受けて、探偵はその事件が人の手で起こしえる事件だと推理す

る。事件の謎が解かれたら魔女の負けで探偵の勝ち、事件の謎が解かれなかったら魔女の勝ちで探偵の負け、って感じ」
「漣ちゃんはともかく、朧ちゃんも知っているんだ」
「司令官に教えてもらったことがあるから。ネットで一緒に動画を見たりもしたよ」
「ちなみに漣もそうです。で、面白そうだから実際にやってみようって感じ」
　なるほど、と潮が納得したように頷く。
「まあ非番で暇だし、それ自体は良いんだけど、推理ゲームで魔女とか出るもんなの？」
「屁理屈推理合戦には元になった作品があって、魔女はそこから来た要素なんだ」
「そして、魔女がいるからこそ、使えるようになるルールもある。それが、赤き真実と青き真実なのです！」
「赤き真実と青き真実？」
　テンションの上がってきた漣の言葉に、曙と潮がそろって首を傾げる。
「赤き真実は魔女が扱える証明不要な絶対の真実！　赤で語られた分は絶対であり、そこには一片の嘘もない！　そして青き真実は探偵が扱える推理の剣！　赤を繰る魔女に対し、魔法の存在を否定するために振るう可能性！」
「……いや、分かんないんだけど」
「まあ、単体での説明は結構難しいからね。具体例と共にやってみるのがいいんじゃな

いかな」
「ふむ、確かに。そういうわけで朧、何かいい例知らない？」
「ええ……」
　漣の無茶ぶりに、困惑した様子を見せる朧。数秒ほど、困ったように眉を下げていた彼女だったが、何かよいものを思いついたのか、
「……ああ、じゃあ適当なのを。とりあえず設定、というか事件の説明として、提督が執務室にいる光景を想像してくれる？」
　朧のお願いに、曙と潮、ついでに漣はその光景を頭に描く。そんな三人の様子を見ながら、朧はさらに続ける。
「で、提督の前に一つの箱がある。箱は厳重にラッピングされていて、中が見えない。その状態で、こういう赤を出してみるね。ゲーム中、箱は一度として開けられていない。ゲーム終了時、提督は箱の中身を知っていた」
「開けていないのに中身を知っていた、ってこと？」
「そういうこと。この、赤で語られた言葉というのは、そのゲームの中において絶対の事実となるの。実は開かれたことがある、とかはなし。開けられていないったらいない、で納得して」
「ゲーム前には開いたことがあるとか、開いてはいないけど他の何かはしたとか、矛盾し

ない程度の解釈は出来るけどね」
「前提みたいなもんなわけね。で、それを踏まえたうえで推理をすると」
「誰かに中身を聞いた……とか？」
　潮のつぶやきに、朧が頷きを返す。
「そうそう。その場合、探偵はそれを青で提示するの。提督は誰かから箱の中身を聞いたって風に。それに対して、魔女はこの青を否定する――青を切る赤をさらに提示する必要があるわけ。提督以外の登場人物は存在しないという感じかな。こうやって赤と青の応酬を重ねて、青を否定する赤が出せなくなったらリザイン――つまり魔女の負け。逆に推理が枯渇していよいよ青が出せなくなったら探偵の負けね」
「ちなみに、赤はその青の一部分でも切れていたらオッケー。さっきの奴だと、ご主人様は耳栓をしていた、みたいなのでも成立するね。潮の推理とは意味合いが異なるけど、青は否定しているからいい、ってこと」
「へえー……」
「だから、青を使うときは何処まで細かく主張するか考えた方がいいかも。あんまりきっちり組み過ぎると、揚げ足取りみたいな赤を出されちゃうから。」
「その時はまたそれを否定するような青を出せばいいだけでしょ」
「まあそれもそうなんだけどね。それと、提示された赤がちゃんと青を切っているかど

うか、それを検証するのは探偵側の仕事になるよ。ずれた赤で切ったふりをする魔女もいるから」
「漣とかはそういうのやりそうね。で、ルールはそれで終わり？」
「いえいえ、もう一つ基本ルールがあるのですよ。その名も復唱要求！」
ぴしり、とまた上機嫌な調子で漣がポーズをとる。ただ、いい加減に慣れてきたのか、曙も潮も――潮ですら――さしたる反応を見せず、ただ黙って視線を動かすことで朧に話を促す。
「ああ、うん。復唱要求は探偵側が状況の確認をする、あるいはこういう赤が欲しい、という場合に魔女に対して出すものだね。復唱要求、ゲーム開始前、提督は中身を知らなかったみたいに。これに対して、魔女はその通り、あるいは少し違う文言で赤を返してもいいし、完全に拒否してもいいんだ。今回なら、ゲーム開始前、提督は箱の中身を知らなかったと私は返すかな」
「断ってもいいの？」
「うん。復唱要求は探偵の権利ではあるけれど、魔女にとっては義務ではないからね。受けると致命的な事態になる、あるいは単に場をひっかきまわしたい、ってことで復唱を拒否できるの」
「実際、復唱要求を完全に撤廃して、青と赤オンリーでやる場合もあるみたいだから

ねー。まあ、潮とぼのが慣れていないし、個人的に面白くないから、漣のゲームではやらないけど」

スルーに堪えた様子もなく、平然と漣が補足をする。そんな彼女の様子に、また強いな、などということを思いながら、曙は頬杖をつく。

「なるほど、大体は分かったわ。で、漣がその魔女を、私たち三人が探偵をして、どっちが勝つかゲームをしよう、と」

「そういうこと！　その感じだと、ぼのは乗ってくれるってことでおけ？」

「暇つぶしにはなりそうだし、あたしは良いわよ」

「私もいいけど……朧ちゃん、例題の答えって結局なに？」

気になる、と言う潮に、ああと朧が頷きを返す。

「答えは箱が透明だっただよ。透明だから中身も見えたってわけ」

「あれ？　でも箱はラッピングされていたって言ってなかった？」

「そこは幻想描写……ああっと、要はゲームでの状況の説明には嘘が混じっていることがあるんだ。あえて言っていなかったけどね」

「それっていいの？」

「赤は真実ってのは、＝赤以外は真実と限らない、嘘が混じっている、ってことだから。基本的に赤以外の言葉は参考程度にして、前提に置かない方がいいよ。というか、そう

いう前提を復唱要求で確認するのが基本かな」
「分かった。じゃあそのつもりで頑張るね」
うん、と頷く潮に、朧もまた同じものを返す。その二人と、思いのほか気乗りしている曙を見て、漣は力強く両の手を打ち合わせる。
「ではでは！　漣の屁理屈推理合戦を始めますよ！」
面白いことになればいいな。それぞれに差異はありつつも、そういう意味合いの思いを、七駆の面々は抱くのであった。